関西自然保護機構会誌 *27*（*1*）：*67−68, 2005*

大原野森林公園観察会に参加して

大阪府立大学大学院緑地環境保全学研究室　中　津　　弘

Report on the KONC-observation meeting in Ooharano Forest Park, Kyoto. Nakatsu Hinomu（*Laboratory of Landscape Architecture and Conservation, Graduate School of Osaka Prefecture University*）

3月19日，KONC主催の大原野森林公園見学会（ポンポン山）に参加しました。実はポンポン山に足を運んだのは今回で2度目，ちょうど4年前の3月，野間直彦さん（滋賀県立大）の調査に同行させて頂いて以来でした。4年前はあまり事情も分からずに花粉症に苦しみながら歩いたという記憶しかなかったのですが，今回あらためて山を歩き，多くのことを学びました。

当日は，地元で組織され，公園運営を委託されている大原野森林公園運営管理協会の方々と野間さんに案内して頂きました。一時はゴルフ場開発が計画されながら，市民の間での反対運動から京都市が計画地を買い取り，保全に向かい始めたポンポン山ですが，鬱閉していた植林部分の植生管理も少しずつ動き出していて，林床が明るくなったところに草本類が増えているとのことでした。林床植物にシカの食痕も散見されました。KONCがモニタリング調査を受託して行っている伐採跡地も見学しました。アカマツの実生も多く見られましたが，ソヨゴの萌芽が草やぶのようにぼうぼうと成長していました。ちょうど私がフィールドにしている京阪奈丘陵でも，管理放棄後ソヨゴが林冠にもうすぐ届くまでに生育した林が多く，このモニタリングサイトがこのあとどう展開するのか興味を抱きました。



林床にコバノミツバツツジなどが生育するアカマツ林（2005年3月19日　編集事務局撮影）.

途中，ヤマシロネコノメ，ゴマギ，ナベナなどの植物，炭焼き窯の跡についても教えていただきました。少し前に降った雨のためか沢筋は増水していて，谷の道を歩くには石の上を飛んでいくども渡渉する必要がありましたが，標高の高い上流部の谷間にケヤキなどのいわゆる河畔植生が広がっているのは，京阪奈丘陵ではこれまで見たことがないものでした。尾根部に生育するカナクギノキも初見でした。まだ少し肌寒かったですが，タムシバは毛布のような綿毛に包まれた花芽をふくらませていました。コナラ・アベマキの林床にも高い角度から日光が差していて，もう少しで春が本

番だということを感じさせました。ミソサザイ，ヒガラ，シジュウカラ，エナガ，メジロ，ノスリなどの鳥も見たり声を聞いたりすることができました。

現地の見学を終えてからの意見交換の場では，地元，市民，研究者，行政が関わって取り組んでいる里山が直面している，可能性と課題についてもいくつか考えさせられました。

案内人の方が指摘された，「まだ京都市民が盛り上がっていなくて，足を運ぶ人も少ない（春先の花の時期だけ訪問客が増える）」という事実は，他の多くの里山と共通するように思います。自然保護についての理解は深まってきているし，里山に興味を持っている人は多いはずなのに，現地に現れる人がまだ少ないことは歯がゆいところです。まだまだ＜需要＞と＜供給＞が一致しない現状については，もっと身近にある里山のことを伝え，様々なプログラムでより多くの市民を巻き込んでいく必要性があると思いました。植物の盗掘が発生していて地元有志でパトロールをしているという話も，このままでいいわけはなく，取り組まなければならない課題です。生物多様性の保全だけでなく，２月に発効した京都議定書の履行を地元京都市でも推進するためにも，雑木林を木質バイオマスエネルギーなどの形で利用していくべきだというのも，まさに里山が環境政策を実施する場として可能性を持っていることを具体的に感じさせる話でした。全てのシステムを十分に機能させるにはまだまだ時間が必要だと思いますが，行政が保全をサポートし，研究者がアドバイスをし，ポンポン山をよく知った地元住民が管理にあたるという仕組みはエコツーリズムの形態として先駆的なものなのだと今さら感じてしまいました。

最後に，私が活動に参加している生駒市北部の高山町（学研都市開発計画地）での今後の取り組みについての提案も頂くことができました。今回も大量のスギ花粉に悩まされましたが，貴重な経験が出来，実はポンポン山は時代の最先端を行く里山だということが分かりました。みなさんに感謝します。